介護等体験実習に向けて

教育実践とストレングス（Strength）

文学部人間関係学科
講師 尾口 昌康

昨年度から「介護等体験」の事前学習に関わるようになり、1年が経ちました。前回は初めての担当ということもあり、かなり緊張して臨んだのですが、今年は「どんな先生の卵とお会いできるのだろう」と楽しみに講義を担当させていただきました。さて、昨年は少々堅苦しい内容で書いてしまったため、今回は少し気楽に読める文章を、と思っています。

私は大学を卒業して今春でちょうど20年になります。小中高、そして大学・大学院で自分が受けてきた教育を振り返ると、様々な先生との「出会い」がありました。その中で共通して言えることは、「好きな先生の担当科目は好きになり、苦手な先生の担当科目は苦手になってしまう」ということです。おそらく皆さんも同じ経験をしたことがあるのではないでしょうか。それは単に、授業が上手い、下手と言うよりも、児童生徒の視点に立った授業やかかわりが出来ているか否かということだと思います。残念ながら私は、高校まではあまり好きな先生・尊敬できる先生と出会うこともなく、さらに学業面でも強い関心を持つ科目もないまま、無目的に勉強させられているような感覚だったのです。

そんな私も大学に入学して、ある先生との出会いで少しずつ変化することが出来ました。幼少時から風変わりで「何故おまえは人と同じように出来ないのだ！」と言われ続けていた私に対し、先生は「オリジナリティがあるね」という評価をしてくれ、一般的には「ピントがずれている」と思われる私の発言に「他者には気づけないユニークな視点だね」と返してくれました。

その先生との出会いによって、劣等感の塊の私は知的好奇心を掻き立てられ、多くの専門書を読み知識を深め、精神保健福祉の領域で実践を重ね、社会人大学院生として研究にも手を広げ、今の私が存在するのです。

少し話は飛びますが、近年社会福祉の領域ではストレングス（Strength）という、その人の得意分野や、持っている能力を活かすという考え方が浸透してきました。私が大学時代に出会ったその先生は、社会福祉のテキストにストレングスという言葉が存在しない頃から、教育の中で実践されていたのです。

さて、話は得意科目・苦手科目に戻りますが、私はさらに勉強を続けるうちに、自分の得意科目と苦手科目はお互いリンクしていることに気づいたのです。もっと言えば、得意分野を伸ばすには、どうしても苦手科目の知識が必要、頑張って苦手科目の知識を身につけると、得意科目の知識が豊かになるということです。苦手科目に着目し努力して克服しようと考えるよりも、その方がずっと楽しいはずです。

人は誰も、好きなことや興味のあることなら頑張ることが出来ます。教育実践の中に上手くストレングスの考えを採り入れた授業や指導が出来る先生になっていただければと思います。

教職を目指す皆さんへ

からだの教室　Laugh
別府大学非常勤相談員　阿部　京子

人に何かを教えるという立場を、職業として希望された学生の皆さんへ

ここ数年、「特別支援教育」という一つの新しい教育の形について、実際に携わっている現場から、ほんの90分程度ですが、お話をする機会をいただいてます。

この講義、毎年、アンケートを取っています。僭越ながら私自身のメールアドレスも記載し、個人的な相談や質問にも答えますよ、と明記しております。昨年も書きましたが最近、直接、質問を聞きに来る学生さん、なんとなく感想をメール下さる学生さんが減ってきてます。

目に見える、または見えない障がいをもっている子どもたちに対して、何らかの力を教え身につけさせ、本来彼らの持つ力を引き出す場面に接するにあたって、「ちょっとした工夫」やまたは「一風変わった視点」を必要とするそのものが特別支援と呼ばれているような気がしています。

でも本当はどの子どもにも必要な配慮であり、視点であり工夫なんです。障がいのない（なさそうな）子どもだからといってある程度情報を与えて後は放っておけば勝手に育つものでは決してないのです。

いつも、特別支援教育や障がいについて、お話をさせていただく時にお願いすることですが、他の障がいのない子どもたちと同じように接してください、人間として当たり前に接してください、と言います。そうすると皆さんは一様に不安な顔をされます。「特別なこと」を聞きに来たのに、同じでいいとは何事かというような表情です。確かに戸惑われることと思います。けれど声高に、特別な支援を必要とする子どもには支援を、と言い続けることと同じく、どの子にも同じような配慮を、視点を、工夫を、と言い続けなければいけないというこだわりを、私は抱え続けています。

特別支援は特別扱いではありません。どの子どもにも「努力してやり遂げた」という充実感を得られるような課題の設定が必要です。そしてそれはどの子も少しずつ、違うのです。どの子どもも努力し、実践し、達成し、見守ってくれた大人とその瞬間を分かち合う喜びを感じるというプロセスは同じです。早さや難易度や、努力の仕方すべてが、それぞれ違うだけです。

自分の力だけでやり遂げることが大事な時期の子、誰かに助けてもらって、手伝ってもらうってなんか嬉しいなって感じることが大事な時期の子ども、ゆっくり丁寧に仕上げることが課題の子、という風に。

今の子どもたちは、早いことや力が強いことだけに価値観を見出しがちです。多分大人社会がお手本なので、教育の現場だけで修正のきくことではありません。

それでも、感受性の豊かな子どもの時期に、いろんな努力の仕方があるんだよ、と教えてくれる大人と出会うことはとても大切なことだと思います。

いろんな価値観、多様な人間観を示すことのできる教職員になって、あなた方に関った子どもたちを、豊かな人間へと導いてください。

大事なことは、つまずいた時、行き詰まったと感じた時、ぜひあなたの周りの方を、大学の先生方を頼ってください。解決しなくても、話すと整理されることもあります。

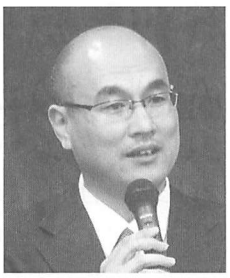
あなたがた自身が、人を頼って安心して自分の仕事に取り組んでください。

教職に就く方に限ったことではありませんが、一人で何でも解決することが大切な力ではありません、と子どもたちに伝えてください。

一人でも多くの方に、子どもの育ちの喜びを分かち合える大人になってほしいと願います。

なんのために 教育者に　成るのか

大分県社会福祉士会理事　Healing forest代表
別府大学　非常勤講師　明石　二郎



「あなたは　今　なんのために　教育者を目指すのか」

いつからか、教えることを喜びとし、伝えることを喜びとする人がいる。

その喜びは、いったい誰のためなのか。いったい、なんのためなのか…。そこがずれると、教育はあらぬ方へとベクトルを向け、そして…氣づかないまま、進み本当の教育の意味を見失う…

教育は、いったいなんのためなのか。誰のためなのか…そんなことを、常に考え一生懸命にやっている教育者が、どれほどいるのだろうか。

地位や学歴の高い方からの評価を重んじ、その方々のための教育に成っているのにもかかわらず、そのことを認めず子どもたちに伝える、自分らしく生きろと…。

「教育者は　本当に　自らの人生を　生きているのか」

教育者が、迷走している。私は、そう実感している。

教育者の成果は何なのか…子どもたちの成績であり、スポーツの実績であり、自らのスキルアップより、地位アップ評価アップ…それは、本当に子どもたちが求めているものなのか…教育は、誰のためなのか…

教育者は、自らの人生を　生きているのだろうか。その昔、教育者は使命感に生きていた。子どもたちのためを本当に考え、子どもたちの成長と発展を心から願っていた。そのため、平氣で時間外でも家に招いてでも、子どもたちのために全力を注いだ。

決して誰かの評価のためではなく、子どもたちのために…

「教育者は　何をする人なのか…」

教育者は、何をする人なのか…そんなことを真剣に考えている教育者がいるのだろうか。研究授業を嫌がる教育者がいる。人からの評価を受け入れない教育者がいる。他者からの教えを受け入れない教育者がいる。学びに身を投じない教育者がいる…。自らを高めない人が子どもたちに向上心を持てと言う。人を思いやれという教育者が、平気で人を子どもたちを思いやらない、民主主義が大切だと教えながら、権威的な関係を子どもたちと作りたがる…教育者の言動は、そのまま教育であることを自己覚知する必要がある。教育者が、地位や学歴や権威に重きを置いていて、障がいは個性だと、みんなちがってみんないいと…心から本当に言えるのだろうか…

「なんのために　教育者に成るのか」

問い続けるのです。あなたは、なんのために教育者に成るのか。誰のために教育者に成るのか。使命のもとに生きるのです。何を自分の人生を通して子どもたちに、これからの人生を生き抜く方法を、自分らしく生きる方法を導くのか。学力向上を悪と言うつもりはないのです。教育者が、怠っているというつもりもないのです。大切なことは、あなたが、なんのために、誰のために教育者に成ろうとしているのかと、いうことを考えて欲しい。その答えが子どもたちである限り、教育者は方向性を見失わないだろう。